



(出 石)

兵庫・但馬国府推定地

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町水上・松岡
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)九月～一九八七年一月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 吉識雅仁・甲斐昭光
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

但馬国府は『日本後紀』延暦二三年正月壬寅(二六日)の条に「遷二但馬国治於気多郡高田郷」とあることから、移転されたことが窺える。国府の推定地として合せて七カ所の説が唱えられており、調査地はその一つである。国道のバイパス工事が計画され、昨年度確認調査を実施したところ、深田地区で木簡三点を含む、多量の遺物が出土したため、本年度全面調査を

行った。

調査区は、円山川左岸の沖積地に位置し、微高地と、それに挟まれた低湿地にまたがっている。付近には奈良時代から平安時代の遺跡が多く知られており、調査区の南西約六〇〇mには国分僧寺、北西約五〇〇mには国分尼寺が存在する。また東一〇〇mには川岸遺跡が存在する。

調査区の東半と西端が微高地であり、調査区中央では、北に開いた沼状の凹地が検出された。木簡は調査区東端の微高地を形成する熔岩礫直上から二点、凹地から二八点の計三〇点が出土した。微高地の上部や縁辺の整地層上から、九世紀前半から一一世紀後半にかけての遺構が検出された。しかし遺構は少なく、柱穴、井戸、溝、土壇等が検出されたにすぎない。その中で微高地の縁辺で検出された柱穴は、単独であり、付近の沼状凹地内から木製模造品が多く出土しており、関連が注目される。

凹地の内部からは、木簡の他に、木履(二三点)、人形・馬形・鳥形等の木製模造品、曲物・挽物・箱・斎串・檜扇など、木製品約三五〇点、須恵器・土師器の坏類、硯類、灰釉・緑釉陶器・黒色土器などの土器類、帯金具等の金属製品が出土している。また「桑」「井」「国当」「福」「東成」「養父」などの墨書土器も多量に出土している。

凹地内の堆積土は下から、黒灰色シルト、灰色シルトであるが、

凹地の黒灰シルト層からは木簡一六点が出土している。同層からは、木製模造品・容器類・服飾具等の木製品と、九世紀前半の土器類が多量に出土している。ただ凹地東岸の土器類は須恵器・土師器の坏類に限られるのに対し、西岸では土師器甕類も相当みられる。

凹地東岸の整地層からは木簡一点が出土し、同層から木製模造品・服飾具・容器類等の木製品と九世紀前半の遺物が多量に出土している。西岸の整地層からも木簡一点が出土しているが、この層中からの遺物は少ない。微高地上の整地層下で和同開珎が、西岸南の整地層上面で富寿神宝が出土している。

この他、黒灰シルト上面及び灰色シルト層の下から、木簡九点が出土している。ただ兩層間では、九世紀前半の遺物を中心に、一〇世紀前半、一一世紀後半の遺物が混在している。

一 沼状凹地西岸

(1) 「造寺米残

二 沼状凹地東岸

黒灰色シルト

(3) $\times \square \square \square \square \square \square \text{石足}$ $\left[\begin{smallmatrix} \text{マ} \\ \text{カ} \end{smallmatrix} \right]$ (137) $\times 20 \times 3.5$ 059

(4) (題籤軸) (145)×21×7 061

(5) $\lceil(\text{符籙}) \times (146) \times 39 \times 3 \quad 081$

整地層

(6) 式部卿
(題籤軸)
文 (128) × 16 × 6 061

黒灰色シルト上面及び灰色シルト層の下

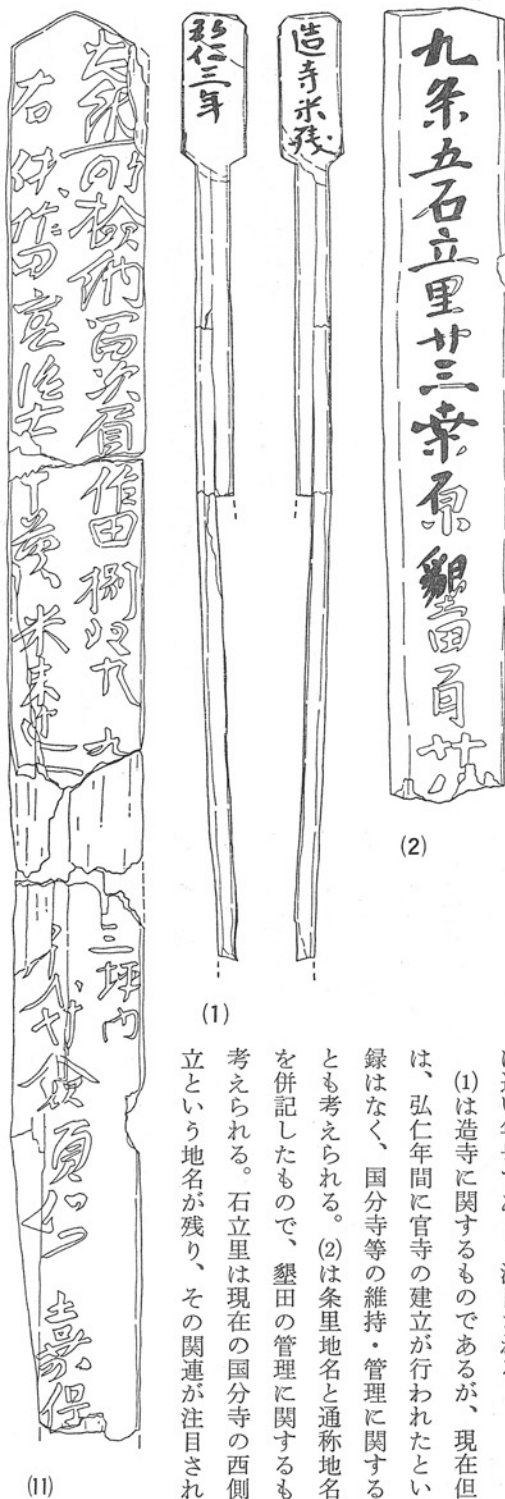
(7) 寛平七年六月四日 (210) × 38 × 6.5 019

(8) $\square\square\square\square$ 為本也 \times $(116) \times 34 \times 6$ 019

(9) 四十六 三四十二 二四八

(10) $\times \square \pm \square \times$ [居力] $(160) \times (22) \times 8$ 081

灰色シルト



- (1) [左カ] 納所檢納富次負作田捌段九三坪内
右件作田寛治七年貢米未進 [検領] [嘉保] ×
(428) × 40 × 6 059
- 三 微高地上
(12) × [三カ] 斗中 [] 上 []
(134) × 20 × 4 059
- (13) [] (題籤軸)
(113) × 21 × 9 061
- 出土した木簡のうち(1)・(4)・(6)・(13)のような題籤軸は八点あり、

黒痕の確認できないものも三点ある。さらに昨年出土の二点を合わせ、題籤軸は一三点が出土している。このように題籤軸の多いことが、この地区の特徴といえる。

内容的には、田と稲の管理に関するものが多く、昨年出土の木簡に「佐須郷田率」と釈読できるものがあることから、それが但馬国内の他郡にまで及んでいたことが窺える。

また年号では、(1)の弘仁三年(八二二)の他、釈文が確定しなかったので今回も報告できなかったものの中にも、弘仁三年、弘仁四年といった年号がみえ、昨年出土の大同五年と合せ、国府移転の年に近い年号であり、注目される。

(1)は造寺に関するものであるが、現在但馬では、弘仁年間に官寺の建立が行われたという記録はなく、国分寺等の維持・管理に関するものとも考えられる。(2)は条里地名と通称地名呼称を併記したもので、壘田の管理に関するものと考えられる。石立里は現在の国分寺の西側に石立という地名が残り、その関連が注目される。

この木簡は気多郡内の条里復原に、大きな意味を持つものと考えられる。

(7)・(8)・(10)・(11)は墨が剥落し、墨痕が浮き上っている。(11)は記載内容・性格など注目されるものである。

釈読は奈良国立文化財研究所寺崎保広氏の御教示による。

6 関係文献

木簡学会『木簡研究』第八号 (一九八六年)

(吉識雅仁・甲斐昭光)

兵庫・初田館跡

- 1 所在地 兵庫県多紀郡丹南町初田
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)九月～一九八七年二月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 岡崎正雄・山田清朝・山上雅弘
- 5 遺跡の種類 集落跡・館跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代後期、平安時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(篠山)

初田館跡は、JR線篠山口駅より南東約1kmの武庫川と篠山川との分水界のある田松川と新田松川に挟まれた、標高約一九六mの自然堤防上に位置する。周辺には大沢城・高仙寺城等の中世山城が多く点在する。日本道路公団が近畿自動車道舞鶴線を建設するのに伴い、発掘調査が行われた。初田は中世の犬甘保、後の酒井庄の内にあり、初田館跡については、寛政六年